



「言葉の力」を改めて感じた
日本語大賞

ライター 上村 雅代

芥川賞作家・荻野アナさんの助手をつとめる傍ら、多くの作品をプロデュースし、最近では、人気アイドルグループNMB48のラジオ番組のシナリオも書かれる等活躍されている上村雅代さんが、日本語大賞の表彰式に出席され、その模様について投稿してくださいました。

去る2014年2月23日(日)、第5回日本語大賞表彰式が行われました。会場は、窓越しに皇居の一望できる、読売新聞東京本社13階の国際会議室。司会・進行を務めたフリーアナウンサーで審査員の梶原しげるさんによると、この日の午前中には東京マラソンも観覧できたといいます。

プロフィール



上村雅代 (かみむら まさよ)

ライター。1980年8月7日生まれ。芥川賞作家・荻野アナ氏の助手として働きながら文章の研鑽を積む。『大震災 欲と仁義』荻野アナとゲリラ隊(共同通信社)共著。現在、息子(4歳)の育児奮闘中。



小学生の部文部科学大臣賞を受賞した小学4年、森田悠生くんは、昨年に続き2年連続の受賞者です。受賞作「ぼくがいるよ」は作中の「ホットケーキのはちみつかけ」や「プリの照り焼き」の匂いが、プーンと読者に届いてくる秀作。退院してきたお母さんが、匂いが分からなくなってしまうと展開し、その上で「ぼくがいるよ」と繋がっていきます。

彼は「どうやったら言葉の持っている力を伝えられるのかを知っている」と大橋善光審査委員。森田くんのような記事を書きたい、どうやったらそのパワーを伝えられるのか教えて欲しい、と褒め称えます。

森田くんの作文は新聞・ニュース・週刊誌にも取り上げられ話題を読んでいます。これほどまでに人の心を動かすのは、技巧でも文章力でもなく、「香り」というフックによって、読者がみるみる作中の世界観に入り込み、共感・追体験できるからです。

この「言葉で伝える力」は、書くことを生業にしている人はもちろんのこと、コミュニケーションを基軸に社会生活を送るすべての人にとって「生きる力」そのものであり、ずっと磨き続けていきたい「心の原石」のようなものでしょう。

賞状・楯・副賞を受け取り、自ら作文を朗読した森田くんの横で、昨年は入院のため来られなかったお母様も「彼がこういう深い考えで居てくれるとは」と微笑まれたのが印象的でした。

中学生の部受賞者の田中秀和くんは、小学校高学年のころに暮らしていたシンガポールの地で「いただきます」に相当する英語が無いことに困惑し、その体験を書き綴った作品「伝えたい感謝の気持ち」を朗読しました。日本を飛び出したからこそ感じた日本語・日本文化への気づきが描かれ、日本に居ながらにして我が国を俯瞰できる作品でした。





一方で、高校生の部の受賞者、岡田東子さんはシカゴ在住、アメリカに移住して7年目。小学校4年生のころにアメリカに転居し、クラスにたった一人きりの日本人として英語漬けの日々を送ってきたといいます。

受賞作「言葉でしか表せない心」はそんな異国の地で、やっと出来たクラスメイトとのやりとりを率直な言葉で表現した作品です。

言葉の壁の立ちはだかる教室で、やっと出来たクラスメイト。彼女の作る折り紙が、唯一のコミュニケーションツールでした。けれど、次第に作成の依頼がエスカレートし、負担に感じた彼女は、友人を無視するという方法で無理矢理関係を断ち切ってしまいます。そんな彼女と友人の仲を取り持ったのは、辞書を引いて頑張って書いた、たった3行の手紙。アメリカ人の友人が、一瞬で読み終えるほど短いものでした。けれど、その言葉が見事、2人の仲を修復させます。

現在日本語補習校の2年生だという彼女は「アメリカ暮らしが長くなるにつれ、日本に帰ってくると自分がアメリカンだな、と思うことがある」といいます。そんな彼女ですが、朗読はとても素直で、私たち聴き手の心にストンと落ちてきました。

最後の受賞者は、一般の部の高山恵利子さんです。朗読の中盤で、場内の空気がピリリと姿勢を正す瞬間がありました。プールの受付係として働く高山さんは、両親とやって来た女の子が口にした「パパが大好き」という言葉にハッとさせられます。その体験から、実の父に「好き」と言えないまま、父が逝ってしまったという心のモヤモヤを振り返ります。正直に「父ちゃん大好きだよ」と言っていればと後悔した彼女は、その後、母が逝ったとき、人目も憚らず「母ちゃん大好きだよ」と叫んでいたといいます。

実は、彼女は母が嫌いだった。話の展開に、会場の空気が張り詰めます。そんな母への複雑な想いを全て含んだ、死の間際の「大好き」という言葉。母と娘の単純にはいかない想いを文章で公開した彼女は、実に凛として、清々しく見えました。

高山さんは言います。いつの日か自分も看取られる日が来る。普段は悪態をついてばかりいる娘。でも、最期に「お母さん大好きだよ」と言ってもらえたら、と。この作文は、お嬢さんへのメッセージ、遺言のような意味も持っているようです。

思いの丈を読み手に伝わるように書き綴ること。それは決して簡単なことではありません。けれども高山さんの作文は、お嬢さんへのメッセージでもあり、読んだ者の心を動かし、読者とその親との関係を変化させるかもしれない底知れぬ力を秘めているのです。

文は武に勝る。武術ならぬ、言葉を選び取る術に長けた4名の受賞者は、私たちに「言葉の力」を改めて教えてくれました。「言葉」によって作者の体験を共有・追体験できると教えてくれた森田くん。日本独自の思想文化を体現した、日本語の美しさに気付かせてくれた田中くん。そして岡田さんは、代替えの利かない、言葉でしか伝えられない想いがあることを教えてくれました。

言葉の暴力は肉体的な暴力の何百倍も人を苦しめ心を沈ませますが、言葉とは、使い次第でこんなにも多くの人の心を動かし、感動、希望を生み出すものなのです。

もう一つ、大きな気付きがありました。それは、他者に伝える手段としての言葉がある一方で、「パパが好き」という言葉をきっかけに母娘の複雑な想いを振り返った高山さんのように、自らを内証するツールとしての「言葉」もあるということです。

自分は何を思い、考え、どんな感情でいるのか。起こった出来事に対し、自分はどうか考え、どうしていきたいのか。自らを振り返るのが言葉であるのなら、その振り返りのきっかけを作るのもまた、言葉なのです。

4点の受賞作に、私たちは何を学び、考え、どう生かすのか。作文がその真価を発揮するのは、読み手の心の中に想いが溶け込み、車輪が回り出した時なのでしょう。

会場に居合わせた皆が多くの学びを得て、大きな拍手のなか、式は閉幕しました。

